

『ドイツ近現代ジェンダー史入門』
 [姫岡とし子・川越修 編] (青木書店, 2009年)

井上 茂子

本書は、同じ出版社から3年前に出された河村貞枝・今井けい(編)『イギリス近現代女性史研究入門』の姉妹編である。しかし「イギリス女性史」の姉妹編なら「ドイツ女性史」となりそうなところを、「ドイツ・ジェンダー史」としたのが、本書のミソである。

女性史研究は、それまで歴史の中で埋もれていた女性の実態を明るみに出し、女性の主体性を確認した点で大きな貢献をしたが、なぜ男女の差異化・序列化が発生するのかについては、なかなか議論を深められなかった。ジェンダー史は、その男女の差異化・序列化のプロセスを分析する。その前提は以下のような認識である。——性差はけっして本質的なものではない。歴史のなかで「真理とは何か」を規定する権力である「知」によって身体的性差に様々な意味が付与されて、女/男の差異化が行われ、序列を伴う二項対立的なジェンダーが構築される。こうして構築されたジェンダーは、政治・経済・社会・文化の全領域で、秩序化・差異化・序列化の基準となり、規範・価値観・アイデンティティを構築し、行動様式や活動空間を規定し、法律や制度の中に組み込まれ、構造を作り出す力として作用する。——本書はこの点をドイツ近現代史で例示する論文集である。

以下、内容紹介と論評をしたい。最初に本書の概観から。本書は2人の編者を含む20名の執筆陣からなるが、概観的記述の担当者(第1部執筆者3名と第2部各章の基本論文執筆者7名)と、トピック執筆者(第2部の12名)に分かれる(編者は複数項目執筆)。世代的には、1940年代生まれ2名、50年代10名、60年代5名、70年代3名。逆ピラミッドだが、若い層も確実に入っている。また、男性4名、女性16名で男女差は大きい。現在日本でドイツ・ジェンダー史を編むならば欠くことのできない男性を含んでいる。そしてなにより、文学史・芸術史・法制史のような、研究蓄積がありながらも政治史や社会経済史と交流が少なかった分野を含んでおり、従来のドイツ近現代史にない本書の特色となっている。この幅広い人選は、日本で女性史・ジェンダー史研究をリードしてきた姫岡氏と、社会史研究で多くの企画を成功させてきた川越氏という、二人の編者の力である。

第1部「近代的ジェンダー観の形成」は、「身分」に代わって「市民的平等」原則が確立してゆく近代社会で、「性差=本質」ととらえる近代的ジェンダー観が、

いかに社会構成の基盤となったかを、思想史（弓削尚子）、文学史（田邊玲子）、法制史（三成美保）の3章立てで分析する。手法は言説分析であり、後続の第二部の前史ないし前提知識にあたる。

弓削論文は、男女二元論が顕著になった18世紀に注目し、性差に関する教養市民層知識人の「科学的」言説を分析して、男女の差異の追求の中に、階層・ナショナリティ・人種の問題が内包されている点を指摘する。たとえば、彼らが好ましいとする男女双極モデルは、貴族層や下層から市民層を際立たせし、「宮廷貴族＝フランス的価値観」と「教養市民＝ドイツ的価値観」との対比は、必然的にナショナリズムを含んでいた。また彼らは、女性の位置の違いを人種別に強調することによって、ジェンダーと人種を結びつけた。論文最後で、近代科学全般が女性不在のまま男性知識人の中で育まれた点を批判しており、主張点は明快である。しかし、男女双極モデルに対して女性がいつも受け身で客体であったのかは疑問が残る。激しい肉体労働をしなくてすむ「か弱い女性像」を、女性の方が積極的に受容し利用していた面もある。受容側の分析もさらに期待したい。

続く田邊論文も18世紀を扱う。「近代ドイツ文学」が構築されていく18世紀は、美が女性に特化され、欲望の充足の仕方でも人間の等級が計られるような、現実ばなれした虚構文学が出現した。文学が単なる娯楽ではなく、あるべき社会を示していた時代であるから（18世紀は教育学の世紀である）、その虚構の言説力は大きかったであろう。

最後の三成論文は、法制史の観点から、18世紀から現代までのジェンダー秩序を三期に分類する。1780年～1870/80年（近代法形成期）は公私二元的＝古典的市民社会型、1870/80年～1970年（近代法変容期）は公私二元的＝大衆市民社会型、1970年以降（現代法形成期）はジェンダー平等志向的＝現代市民社会型である。そして、公私二元論を法的な人格論と関連づけて論じ、最後に近代家族法システムとジェンダーの関係を整理する。このような長期的概観は、視野の拡大に役立つ。また、現実の紛争解決のために作られる法律が、逆に現実を規定してゆく点は、法の本質を垣間見せ、興味深い。

第2部「社会変動とジェンダー」は、近代的ジェンダー観が、実際に近代の政治・社会システムや秩序、また文化形成にどう影響を与えたか、また社会変動に応じてジェンダー観がいかに再構築され変化したか、また女性と男性がその渦中でいかに生きてきたか、19～20世紀の実例で提示する。文化・教育・労働・家族・セクシュアリティ・女性運動・ナショナリズム／男性性、と7章立てである。

第1章「文化」では、基本論文（香川壇）が、表現主義と女流芸術という二つの現象に関する言説を分析し、表現主義がナショナリズムや男性性に関連づけて理解される一方で、女性の芸術性は性差イデオロギーによって、否定・劣等視されたこ

とを明らかにする。冒頭、「女性の大芸術家はなぜいなかったのか」という問いの解答例として、①女性の本質的劣等性、②知られていないだけ、③教育や就業の機会不足、④芸術性の基準の偏り、をあげているが、④も大いに言えるということであろう。トピック(玉川裕子)はファニー・ヘンゼル(メンデルスゾーンの姉)を例にして、女性の音楽活動(作曲・演奏・音楽会主催)が制限されていたことを示す。同時に、改宗ユダヤ人ゆえにドイツ人の市民的価値規範に合うよう自己規制した点も指摘する。「周辺人の過剰適応」と解釈でき、興味深い。

第2章「教育」では、基本論文(小玉亮子)が、近代教育学がジェンダー特有な分業を再生産し強化してきた点を、母性論と女子教育の制度化から指摘する。なるほどと思う一方、そもそも同性間においても、教育は平等を生み出すだけではなく格差も生み出している現実が想起される。トピック(原田一美)は、ヒトラー・ユーゲントを取り上げ、ナチスはたしかに男女分離のジェンダー観を持っていたが、人種主義的民族共同体を作るため、「強くて勇敢な女子」の育成や、女子に「男子と同等の教育」を要求するという逆説が生じたことを指摘する。ジェンダーよりも人種/民族の優位が、ここでは見て取れる。

第2章「労働」では、まず基本論文(姫岡とし子)が、労働とジェンダーをめぐる研究史を整理する。女性労働を可視化した女性史や、労働の男女別がなぜどのようにして形成されるのかを分析するジェンダー史の功績を説いた上で、言語論的展開以降のジェンダー史研究に対する「女性の主体性を否定している」という批判に対し、反論する。続く3つのトピックは、女性の商業教育とOLの急増(田中洋子)、ドイツ郵便における労働のジェンダー化(石井香江)、戦後西ドイツ労組の時短政策(柚木理子)がテーマである。田中論文と石井論文は、いわゆる「女性職」がいかに成立し、女性たちはいかに就職し、労働し、生活していたかを描いているので、女性史的色彩が強いが、柚木論文では、仕事と家庭(夫・妻・子供)との関係に重きが置かれている。この「労働」の章は、全体の中でもっとも具体的にイメージがしやすく、「労働のジェンダー化」がよく描けていると思う。

第4章「家族」は、若尾祐司論文で、多産多死の時代から子供二人家族時代への変化を、南ドイツと東ドイツの村落の家族を対比させながら説明する。時期的にも地域的にも幅広く、データも盛りだくさんである。都市市民層の分析が多い本書では、農村に重点を置いた本論文は貴重である。ただ、末尾のフェミニズムの到来の言及は、少し唐突な印象を受けた。トピック(川越修)は、ピルの導入の背景と、導入による社会への影響を、東西両ドイツを対置させて論じる。ピル導入の研究には未知の部分が多いが、ないものねだりと知りつつ、川越氏の「男の視点」からのより踏み込んだ考察を望みたい。

第5章「セクシュアリティ」では、基本論文(川越修)で、セクシュアリティの

概念と研究史の整理があり、日本におけるセクシュアリティ研究の遅れが批判されている。たしかに、自分のセクシュアリティ観があらわになるためか、この分野は研究者が少ない。トピックは三つ。原葉子論文は、「性的成熟期」と「更年期」についての医学の言説を分析する。水戸部由枝論文は、19世紀末から20世紀初頭の売買春について、状況・言説・魅力の3点を分析する。田野大輔論文は、ナチズムの性愛賛美が「性革命」促進の効果を持っていたことと、人口・人種政策に根ざしていたことを指摘する。3本とも若手らしい新鮮な切り口である。

第6章「女性運動」では、基本論文（姫岡とし子）が、ネイションとジェンダーの関係を視野に入れて、市民的女性運動右派を概観する。男女の領域分離を基礎とする右派は、政治活動に活発であり、女性の領域からドイツ的なものを強調し、男女平等を目指してジェンダー秩序を変えようとするフェミニズムを敵視した。右派は、勢力は大きいにもかかわらず、大方の研究者の好みに合わないためか、研究が少なく、本論文は貴重である。トピック（中野智世）は、社会福祉職にみられるジェンダー構造を論じる。福祉が母性の発揮として職業化されたので、男性福祉職は既存の女性職の中ではなく、青少年福祉の職が新たに作られた。ここでも、「労働のジェンダー化」が見て取れる。

第7章「ナショナリズム・男性性」では、基本論文（星乃治彦）がホモソーシャルの概念を使って、軍隊と宮廷という二つの空間における「男らしさ」を分析する。「軍隊が男を作る」とか「学校と軍隊が国民を作る」とか言われるが、「国民・軍隊・男性」という三位一体は、種々の対抗要素（地域差、階級差、宗派差）を内包し、「战友」と言うだけで一体化できなくなっていった。一方、宮廷における従来のホモセクシュアルを含むホモソーシャルな関係も、時代とともに変化した。トピックは二つ。大貫敦子論文は、「英雄的死」に関する言説から男性性の範型の変化を探る。ナポレオン戦争や第一次世界大戦初期の英雄像は「女性的」な穏やかさやエロスの要素を含んでいたが、次第に冷徹で攻撃的な新しい人間に代わっていったという。北村陽子論文は第一次大戦による戦争障害者を取り上げ、身体の欠損を補って扶養者役割を果たす場合には「男らしい」と見なされるが、障害を強調して軍人年金の引き上げを要求する場合は「女々しい」とされ、社会生活の復帰が困難な場合は「男らしさ」を奪われた存在の烙印を押されたという。「男は強く、家族を養うもの」という規範の強さ、それに縛られる男性の悲哀も示している。

最後に本書全体について。所収論文のほとんどで、ジェンダーが、人間集団を分ける他のカテゴリー（階級・階層、人種・民族など）と、どのように関連しているかが指摘されており、単純な男女関係係で終わっていない。これは本書のメリットである。ただ、ジェンダー論につきものの、どの国の話も同じに見えてしまう「既視感」がある。ゆえに、最後に「ドイツ的な特徴は何か」という指摘が欲しかった。

また、本書の基本認識および近現代史という時代的限定のせいも、言説の力と現実社会の反応（受容・反発・同調・無視など）との関係は、どうしても前者の方が強く描かれており、現実社会から言説への作用の方が力不足に思える。これは今後の研究に待たれることでもあろう。いずれにせよ、現在の日本人ドイツ史研究者の到達点を一読できる便利な一冊となっている。